○ホームページ:「はらまち九条の会」で検索してご覧ください。
「会報」も創刊号から最新号まですぐに読むことができます。

放射線測定器
(ガイガーカウンター)

九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No. 321
2018(平成30)年10月 1日(月)発行

デザイン・会員 朝倉悠三さん

■**はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法第9条を護って「戦争をしない国・日本」をめざし、支持政党などを問わない自由な市民の会です。
■05年12月結成。会員は南相馬市原町区を中心に419名。年会費千円
■3.11の大震災後、「事故の福島第一核発電所(原発)に世界一近くで活動できる"九条の会"」を自覚し、「日本国憲法の草案を起草した憲法学者鈴木安蔵(小高区)の故郷の"九条の会"」を誇りに活動しています。

"記憶されたものだけが、記録にとどめられる"(民俗学者 宮本常一)
"記録されたものしか、記憶にとどめられない"(ノンフィクション作家 佐野眞一)

○大震災から7年半、原発事故はまだまだ進行中でその不条理さは深まるばかりです。忘れ去られようとしていますが、被災者としてしっかり書きとどめたり、著作や映像などで発信を続け、教訓として次世代へ伝える義務があるような気がします。

福島県九条の会発行のブックレット7

『戦争体験・日本国憲法 そして原発事故』 福島県九条の会発行・¥300

○今年6月の新刊。A4版、45ページ。県九条の会の活動費捻出のため、県内15名の方々から戦争体験や憲法への思い、原発事故の不条理を寄稿していただき、大変濃密な内容です。
○敬称略での紹介ですが、①「憲法状況の今」**吉原泰助**、②「戦争責任 いまだ消滅せず」**呑川泰司**、③「軍国少年がいま生きているワケ」**高橋力**、④「戦争体験と日本国憲法」**畑孝一**、⑤「原爆投下と戦争敗北の時期を生きて」**星埜惇**、⑥「私の戦争体験」**真木實彦**、⑦「みんなが軍国少年、軍国少女にされた」**遠藤宮子**、⑧「非戦、非武装国際貢献、非武装防衛」**鞍田東**、⑨「憲法九条こそ、私たちの安全保障」**伊藤寛**、⑩「疎開と避難、そして戦災と核災」**若松丈太郎**、⑪「福島県民が体験した戦争と原発過酷事故」**伊東達也**、⑫「大震災時の、南相馬市の混乱ぶりを振り返る」**桜井勝延**、⑬「東電福島第一原発事故に遭遇して」**荒川紘**、⑭「東電福島第一原発事故と震災関連死」**今野順夫**、⑮「原発事故裁判」**中島孝** **<ご希望の方は事務局(山崎)までご連絡ください>**

会員さんの著書 『詩集 望郷の祈り』

齋藤和子著・花神社発行・¥2300+税 ○「3.11以来、身に付けていたのは"言葉"だけ。極限で文学や詩は、どんな力となりえたのか」と作者自身が震災被災の中で問いかけながら紡ぎ出された30編の詩集です。

憲法のドキュメンタリー映画とその著書

『読む 不思議なクニの憲法』 編・著:松井久子

発行:エッセン・コミュニケーションズ・¥1000 ○政治のことを考えないこの「不思議な国家と国民」、憲法を「自分ごと」と気づいてもらうために、2016年に映画を製作し全国350カ所で上映。そのまま著書として発行。

原発事故被災者の映画 『福島は語る』 監督:土井敏邦・2018年製作・170分

○人災の原発事故により、地域は破壊され、家族と離別したり人生も一変を強いられた被災者15名のインタビューだけで構成された記録映画。"反原発"と声高に叫ばなくても、過酷事故に翻弄され苦悩し吐き出す「人の言葉」、その訴える力は「映像」以上です。
○南相馬市で自主上映会を開催しよう、という声もあります。

No. 321

戦争や大震災のこと、原発事故の不条理を語りつぎましょう

○震災前から本会報では「私の戦争体験」３７名分を掲載してきました。話したり、記録に残さなければ次世代には伝わりません。皆様の体験のご寄稿をお待ちしています。

私の戦争体験 38 その1

私が伝えたいこと ①

南相馬市原町区・会員　野村静子

父母の生い立ち

私の家は、原町区の四つ葉通りの角で「ノムラ商店」という雑貨屋さんでした。両親が、マッチ、木箱ひとつから自立して、小林眼科のとなりにお店を建て商売を始めました。

父は野村清助、明治三十五年生まれの三男坊。尋常小学校四年で卒業すると、相馬の桜井呉服店というところに丁稚奉公に出されました。母ミツは明治三十九年、双葉町新山の下条の生まれです。三反百姓の娘だったので大変な働き者で、それで母は原町の父にお嫁にきたんですね。

孤児で苦労した祖母

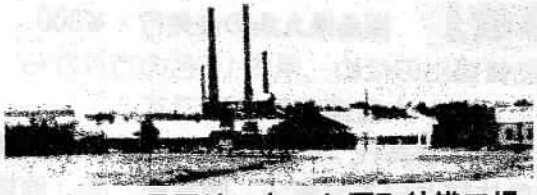
その父の母親は明治九年生まれで、親の顔も名前も知らないみなしご。町の資産家のところに六歳のときから働いていた。字は少し大きくなってから、いろりの灰で「いろはにほへと」だけはカタカナで、火箸で書いて覚えた。昔の「おしん」状態でしょうね。「六歳の時から人の釜の飯を食べた苦労はお前たちにわかるか」って言っていた。訳あって三男の父のところにきました。

幼い頃の戦争の記憶

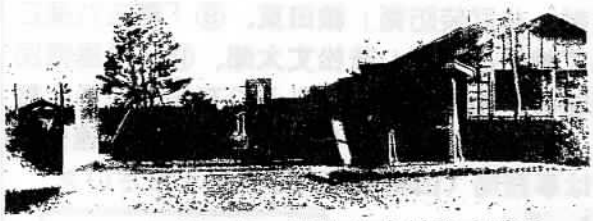
私は昭和十五年生まれで、戦争のことは、幼い記憶です。終戦は昭和二十年で五歳のとき。でもなんか人間の記憶って不思議ですね。すごく強烈なことは覚えていて、小学校のことは覚えていなかったり。姉は昭和七年生まれで八十四歳になりますが、けっこう覚えています。

原町紡織工場が空襲されて

原町には「原町紡織工場」という陸軍の軍需工場があって、爆撃※にあっています。小学校は国民学校とよばれていて、姉は今でいえば小学校五、六年生。姉と友達が工場に慰問に行ってね。当時あった原町実科女学校の生徒たちが、「原町紡織」に動員されて手伝っていました。ところが「原町紡織」が昭和二十年二月十六日爆撃されて、国民学校の鈴木小松先生が亡くなりました。



▲現在の国見団地にあった原町紡織工場。



▲原町飛行場正門。門柱や格納庫も残る。

四つ葉通りの角の私の家の前のところを、担架で血だらけになった小松先生が運ばれていくのを、みんなで担架のところに集まり、姉も目の前で見ていた。朝日座の前の渡辺病院に運ばれたけど、駄目だったということです。

（※これは東北地方で初の空襲で、同時に、原町高校の前身の相馬商業学校生十七歳斎藤和夫、女子挺身隊員の二十二歳星スズイと十九歳の大原ヨシ子の四人が犠牲になりました。）

好きだった飛行兵さんが・・

また原町には飛行場があり、特攻隊の、今で言うと練習場がありました。そこの兵隊さんの何人かが、原町の家庭に分散して泊まり、うちにもその時泊まっていました。一緒に暮らしていたうちのおばあさんという人は、とっても愉快な人で、民謡を歌ったり、ひょっとこ踊りをやったりしておもしろい人だから人気があって、兵隊さんたちはとても喜んで、たくさん出入りしていたんです。姉の話では、そのなかに姉が好きな兵隊さんがいたそうです。ところが・・・。

姉は小学五、六年生の頃、渋佐の海でみんなで水泳ぎをしていたら、そこに異様なカーブで突っ込んできた飛行機があったの。うちの姉たちはそれを見て、「変だな、変な方向に飛行機が飛んでくるな」って見ていたら、海に突っ込んじゃった。訓練中の事故でした。そしたら、その方が姉の好きだった兵隊さんで、京都のお寺さんの一人息子で、親が遺骨を引き取りに来たそうです。姉の初恋でした。（つづく）

○この体験は、**まなびあい南相馬発行『語り継ぐ、ふるさと南相馬』**から、許可をいただき転載しました。○また、寄稿文は編集者の責任で一部略、また文中の（※）は編集者が書き込みました。